

# 伝統的民家・新住宅における生活近代化と住空間 —ベトナム・ドンラム村農村集落保存に関する調査研究—

山田実加子・友田博通

Life Modernization and Housing Space in Traditional and New Houses  
—A Study on the Village Preservation of DuongLam Village, Vietnam—

Mikako YAMADA and Hiromichi TOMODA

Presently, Vietnam is undergoing rapid development and modernization. To leave farm villages intact to future generations, we started the preservation of farm villages, with DuongLam, HaTay as a beginning.

The Japanese Agency for Cultural Affairs concluded a cooperation agreement with the Vietnam cultural Heritage in March 2003. Showa Women's University and Nara National Research Institute of Cultural Properties presented the investigation report and the preservation plan document in December 2004.

In November 2005, the village of DuongLam was designated as a national cultural property. In May 2006, the temporary preservation regulation of management, preservation, restoration, and practical use of ruins was issued. Subsequently, the preservation and restoration of the ruins were started.

*Key words:* Vietnam (ベトナム), Southeastern Asia (東南アジア), farm village (農村集落), house investigation (家屋調査), cultural property preservation (文化財保存)

## 1 研究目的と背景

ベトナム・ハタイ省ソンテイ市ドンラム村は、2003年3月、日本国文化庁とベトナム国文化情報省とが集落保存協力の国際協定を締結し、昭和女子大学と奈良文化財研究所が調査研究協力を実施してきた。その結果、2005年11月、農村集落で第1号の国指定文化財となり、2006年5月にソンテイ市条例が公布され遺跡保存事務所を中心に保存事業が開始された。

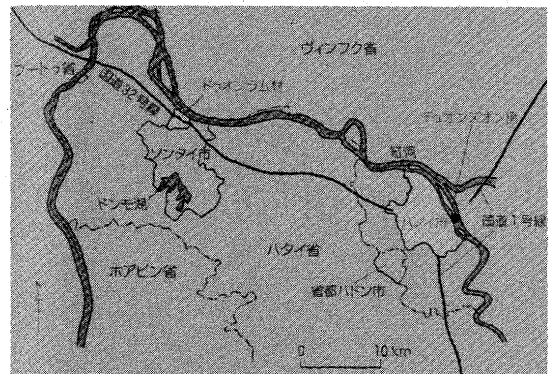
本研究では、保存事業の中核をなす人が住まう中で伝統的民家をどのように保存していくかについての指針を作ることを目的としている。また、伝統的民家と建て替えてしまった新住宅を対象に居住者ヒアリング調査・家具配置調査・水回り調査を行い、伝統的民家の利点を明らかにするとともに、改造・建て替え実態とその要因を明らかにする。伝統的民家を保存しつつ現代生活に適應させる検討資料とする事を目的としている。

## 2 研究対象地の概要

### 2.1 ドンラム村の概要

ハタイ省ドンラム村は、ハノイ北西約40キロに位置し、

紅河デルタの中ほどにあり、面積は、8025 ha、9つの集落(モンフー・カムティン・ドンサン・ドアイザップ・カムラム・フカン・ハータイ・フンディン・ヴァンミュー)から形成されている(地図-1)。ドンラム村の中で、現在は一体的な家屋群をなし農村集落としてまとまっているのは、旧ミア村と呼ばれる4集落(モンフー・カムティン・ドンサン・ドアイザップ)である。2006年時点では、国の重要文化財として、ベトナムの独立を勝ち取ろうと戦ったドンラム村出身の英雄フンフン・ゴクエンの廟、鄭壯皇帝の女帝として定められたミア寺など単体7件が指定されている。



地図-1 ドンラム村の位置図

## 2.2 保存方針

保存地区は、旧4集落にカムラム集落を加えた5集落である。その中で保存地区の中心とされるモンフー集落が保存地区I、他集落ドンサン、ドアイザップ、カムティン、カムラムが保存地区IIである。保存条例では、保存家屋は建物外形を維持し、塀・庭等の敷地形状の変更も認められない。保存物件でない家屋を建て替える場合も敷地利用形態の変更は認められず、保存地区Iでは1階建てで傾斜屋根、伝統的建築資材を用いるとしている。保存地区IIでは、2階建て以下で、傾斜屋根で伝統的建築資材を用いると定められた。

## 2.3 保存対象地区: 旧ミア村

ドンラム村の中で、現在は一体的な家屋群をなし農村集落としてまとまっているのは旧ミア村と呼ばれる4集落で、モンフー(328世帯)、カムティン(161世帯)、ドンサン(427世帯)、ドアイザップ(221世帯)である。

もとは4つの異なる集落であり、建て詰まった現在も各集落の人はそれぞれの集落で異なるアプローチ路を利用している。各アプローチの入り口にはかつては門があり集落の単位が明確であったが、現在は痕跡だけの場所もある。

保存地区Iに指定されているモンフー集落の特徴は、集会所に面する広場の存在であり、この広場の東側から入り口には門のあるアプローチ路が取り付け、北側からも小さいアプローチ路がある。その広場から南側へ1本の太い道が下る。一方、東西に細い道が多数出ている。1810年以前に建設された民家は集会所と広場を頭に南側に下がる道沿いに点在し、明らかに古い道であることが分かる。また、1900年以前の民家は、この古い道から出る西側の道に多数見られる。一般的にベトナムの集落は「魚の骨」の構造とも言われ、背骨に相当するのが南側に下がる古い道で、

小骨に相当するのが古い道から東に伸びる道と推測される(地図-2)。

## 3 研究方法

保存地区Iに指定されているモンフー集落を対象に調査を実施し、伝統民家・新住宅を対象に家屋平面図、家具配置図、ヒアリング調査を行った。家の中まで保存すべき伝統民家の中から21件、新しく建て替えられ景観を著しく損ねた住居については12件調査をした(地図-3)。

03・04年には、ドンラム村民家悉皆調査(図面採取と家屋調査)の結果を受け、2004年8月、1950年以前とされる歴史的文化価値の高い家屋を対象に図面採取・ヒアリング・家具配置等の生活調査を行った。悉皆調査に基づく建設年代別の民家数は表-1、生活調査を実施した民家数は表-2に示す。

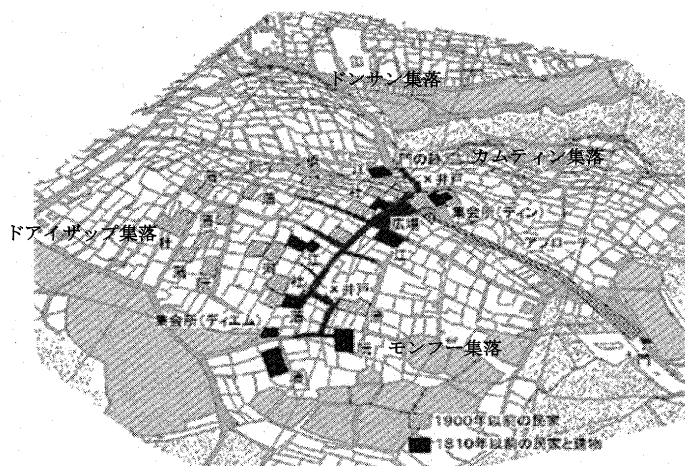
05年は、集落保存をするにあたり問題となっている2・3階建ての新住宅についての生活家具調査等、06年は改造・建て替え実態とその要因について調査を実施した。

## 4 調査概要

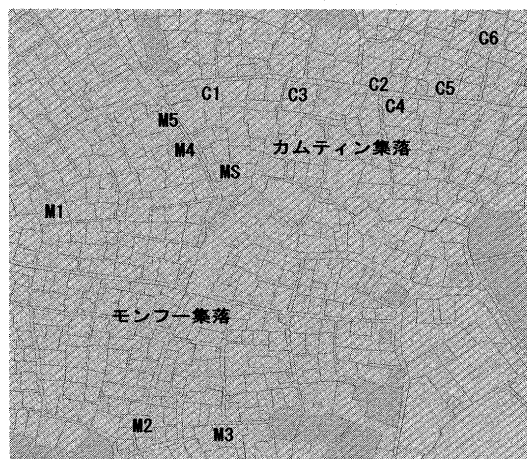
### 4.1 伝統的民家での生活

ドンラム村の保存に際し対象とした4集落では、1900年以前に建設された民家の比率は、モンフー集落とカムティン集落が高い。面的な集落保存にはモンフー集落とカムティン集落が重要な地区であることが表1・2からも分かる。一方、ドンサン集落・ドアイザップ集落は、1850年以前に建設された民家が多くあり、重要な民家が存在する。これについても少なくとも単体としての保存が求められよう。

伝統的民家での住生活の調査のため、調査対象住戸は4集落から選定、1900年以前の民家を中心に調査を行った。



地図-2 集落の構造 3D 地図 1/10000



地図-3 新住宅調査対象家屋

表-1 集落別家屋建設年代

集落名	～1850	～1900	～1950	1951～	全体
モンフー	7	53	36	232	328
カムティン	1	20	8	132	161
ドンサン	15	14	24	374	427
ドアイザップ	10	3	6	202	221
合計	33	90	74	940	1137

表-2 伝統的民家生活調査戸数

集落名	～1850	～1900	～1950	全体
モンフー	4	14	3	21
カムティン	2	9	1	12
ドンサン	10	5	1	16
ドアイザップ	3	1	0	4
合計	19	29	5	53

### ① 住宅のモデル化

ドンラム村での生活の概要を把握するため、住宅のモデル化例を図-1に示す。敷地は長方形、建物や塀で囲まれた閉鎖的な空間で、街路に面し門が開くのみである。敷地中央には庭を配し、「主屋」と複数の「付属棟」が「中庭」を囲み、街路に面しては開口部を持たない。庭の脇には「井戸」を配し、「門」は主屋正面を避けた位置に設けられる。

また、主屋の正面は南側に限定されず、斜面の下り方向を正面とする場合も多く、家屋の方位を一般化することはできない。そのため、同一街路に妻側の家並みと平側の家並みが面する場合もある(写真-1)。

「主屋」は、間口5間、奥行き3間で、両側に1間の

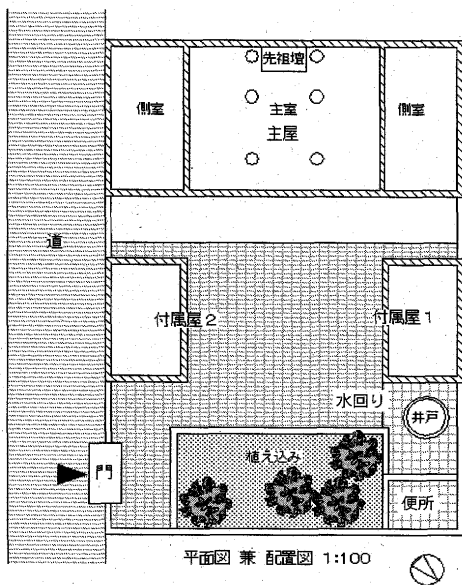


図-1 伝統的民家のモデル化例

「側室」、中央3間が「主室」、正面側に半屋外空間の「軒下」がある。「主室」と「側室」は板壁で仕切られ、独立した空間となっている。柱間寸法は間口方向2.0～2.6m。「側室」は片側が欠損している例も多い。

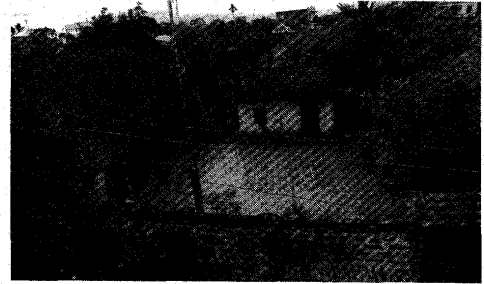


写真-1 伝統的民家の配置例

### ② 「主屋・主室」の使われ方

主屋・主室は、3間のうち中央間には先祖壇が置かれる(写真-2)。中央間にはさらに木卓か木製ソファーセット、両サイドには、飾り棚・木卓・木製ソファーセット・ベッド等が置かれる。

主人は主室の木卓やベッドに寝るのが一般的な伝統家屋のしきたりで、主婦や長男も主室で寝る場合がある。先祖を守る・祀るなどのしきたりと関係があると推測される。主人は、先祖とともに主室で寝て食べてくつろぐことになる。木製ソファーセットは、来客の際にはお茶を出してもてなす応接スペースであると同時に、家族の食事だんらんの場にもなる。木製ソファーセットの位置は、ドンサン集落では中央間、モンフー集落では中央を避けて置かれる傾向がみられる。先祖壇に対する考え方が若干異なると推測される。

ハノイ旧市街やホイアンでは、ソファーセットではなく木卓の上に座して食事だんらんする事例がみられた。しかし、ドンラム村ではこの形式はなく、現在は、木卓をベッドに使用するのが一般的である。農作業の合間の食事は履物を脱がず作業着のまま摂る傾向があり、町家より早く座式の生活スタイルが消失したと推定される。

しかし、モンフー集落・カムティン集落のディンは床が残り床上に座す。また、祭礼等でも地面にゴザを敷いて食事をする。ドンラム村の農家でも伝統的には座式の生活があったと考えられる。

### ③ 「主屋・軒下」の使われ方

ドンラム村の主屋の「軒下」は一般的には奥行き1メートル程度だが、様々な生活行為が見られる。雨の時や日差しが強い時などに過ごす場所であり、作業スペース、犬を飼う場にもなる(写真-3)。

これに対し祠堂では、「軒下」から参拝するため軒下が広く深い事例が多いが、ドンラム村では住居にも「軒下」の奥行きが深い事例がある。この場合は、軒下に木製ソファセットが置かれ、応接スペースでもあると同時に、家族の食事だんらんの場として日常生活の重要な場ともなる。建具で囲み室内化する例も見られる。

#### ④ 「主屋・側室」の使われ方

家主は「主室」を寝室とするため、「側室」は、子供部屋・若夫婦寝室・主婦室などになる。家族人数が少ない場合は寝室として使わない場合もあり、その場合は、収納・作業場・調理場などに使われる。また、「側室」は寝室として使われている場合でも、作業場・調理場・収納などを兼ねることが多い。

#### ⑤ 台所＝「付属屋」

ドンラム村では台所は独立した付属屋が使われている(写真-7)。台所は基本的には新しい建物の場合が多いが、中には彫刻を施した小屋組みを持つ古い付属屋の場合もあり、台所として「付属屋」を使うことは伝統的な形式と考えられる。内部は土間で火を焚く例、木の台でガスコンロを使用する例、タイル貼りの台でガスコンロを使用する例など、近代的な形に改変が進んでいる。

食器等は、「主室」や「側室」に置かれ、主婦は材料の調理は井戸端で、煮炊きは付属屋で、盛り付けは主室・主室や側室で、後片付けは井戸端で洗い、主室まで戻す。主婦の炊事作業の動線はかなり長く、生活近代化の要求が出

ると予想される。

#### ⑥ 水回りの付属屋化

ドンラム村の伝統的家屋では、水回りは庭にある井戸を中心に屋外ですべてが営まれる。井戸端では行水・洗濯・食べ物の調理・食器洗い等の様々な行為がオープンに行われ、便所のみがレンガの目隠し程度の塀で囲まれる(写真-6)。しかし近年は、伝統的家屋にも井戸ポンプによる水道が完備した便所とシャワー室を独立した付属屋として新築する例が多い(写真-5)。この場合、1階建てではあるが屋根はフラットのコンクリートスラブとし、その上にコンクリートの高架水槽が作られた。近年はさらにステンレスの高架水槽が流行し、景観上大きな問題となっている。また、水回りのうち調理や食器洗い等は、井戸端に残り、洗濯は洗濯機が購入されるとシャワー室に入る。なお、シャワー室と便所の位置は、近さを優先し井戸から離れた主屋のそばに移動する場合と、便所の臭いを気にして離れた位置に置く場合がある。

#### ⑦ その他の「付属屋」

家によっては、さらに横屋と呼ばれる寝室や、作業場・家畜小屋・農器具置き場等々、各家の状況により「付属屋」がある。主屋が、建て替えられ改造されている場合でも、「付属屋」に細かな彫刻が施された小屋組みが残る例もある。現在は使われていなくても、「付属屋」も伝統的には重要な使われ方をしてきたと推測される。



写真-2 主室・主室中央の先祖壇



写真-3 主室軒下



写真-4 門・レンガ敷き・植え込み



写真-5 シャワー室・便所の増築



写真-6 井戸端と塀で囲まれた便所



写真-7 付属屋の中の台所

### ⑧ 「中庭」と主屋からの眺め

現在の伝統的民家の中庭は、レンガ敷きとなっている。収穫期に籾を干す、祭礼の時にテントを張っての宴席などに使われるが、伝統的にいつの時代からレンガ敷きになったかは不明である。集落内の道も、近年までは土で、その後中央部がレンガ敷きと両サイドが土となり、現在全面レンガ敷きとなった。一方、中庭には白い低い手すりに囲まれた植え込みが多く見られる。主屋からの眺めを意識したもので、レンガ敷きと植え込みが明確に意識されている。ドンラム村の中庭のレンガ敷きと植え込みのデザインと歴史についてはさらに検討が必要である（写真-4）。

### ⑨ 「門」と出入り

ドンラム村の道の特徴は、ラテライトの塀と民家の幅の狭い門。牛に引かせる荷車が道幅を最大に必要なとするが、荷車が中庭まで入れない家も多い。近年、アクセス路の幅が広い家では、アクセス路に面し門の幅を広げる生活上の要求が見られる。

## 4.2 新住宅の状況

ドンラム村の中で、伝統的民家の比率の高いモンフー集落とカムティン集落を対象に、新住宅の建設状況を調査した。伝統的景観を損ねていることが外から見て明確にわかる2階建て以上の洋風レンガ造の家屋（新住宅）を対象に、2005年8月、新住宅の図面採取・ヒアリング・家具配置等の生活調査、2006年8月、主屋を建て替えた事例に対し建て替える前の住宅に関する補足調査を行った。調査状況は表-3に示す。

2004年に実施したドンラム村民家悉皆調査（図面採取と家屋調査・表-4）から、1951年以降に建設された住宅は、モンフー集落で328件中232件、カムティン集落で161件中132件、そのうち2階建ての件数は、モンフー集落15件、カムティン集落11件であり、2004年以降も増加して

表-5 部屋数増加要求と建て替え形態

No.	建築年	前住居の形式	家族構成	新住宅の形式	増加分	伝統住宅に住みたい
C6	1983	主室+側室	夫婦・息子夫婦	主室1階+側室2階	若夫婦室	○資金的に無理
C2	1995	主室+側室	夫婦・息子1・娘2	DK便所+主室1階+側室2階	台所水回り+2室	○資金あればもう一度
C4	1998	主室+側室	夫婦・娘1・息子1	主室2階+側室2階	子供室×2	○資金あれば住みたい
C3	1998	主室+側室	祖父母・夫婦子供2	主室1階+側室2.5階	若夫婦室	×住みたいと思わない
M4	2000	主室+側室	祖母・姉・夫婦子供2	主室1階+側室2階	夫婦室+子供室	×今の生活が良い
C1	2002	側室+主室+側室	夫婦・息子1	ペンシル型2階	子供室+1室	○だがお金がない
M1	2003	側室+主室+側室	夫婦・長男夫婦・弟2	ヴィラ型総3階	台所+7室	○息子達のため建て替え
C5	2003	庭先分割	主婦・長男夫婦・孫1	ペンシル型2階	寝室×3	○涼しいから住みたい
M2	2005	主室+横屋	夫婦・子供6	主室1階+側室3階	子供室×3	×白蟻の被害や腐る
M5	2005	庭先購入	主婦・息子1	ペンシル型2階	店+家	○昔の場所に住みたい
M3	2005	主室残す	夫婦・息子1・娘1	店+DK+BD	レストラン+家	×住みたいと思わない
MS	2006	主室+側室		1LDK		

No: C (カムティン集落) M (モンフー集落) 6 (通し番号)

いる。調査は、モンフー集落6件、カムティン集落6件を調査した。

### ① 新住宅の建設状況

カムティン集落の新住宅は、1982年以前は平屋であった。多くの場合、レンガ造白漆喰塗りであり、小屋組みは簡易な木造の傾斜屋根瓦葺であった。

1983年、初めてカムティン集落に2階建てコンクリート造の新住宅（C6）が出現する。2000年以降、平屋建ては減り、急激に2階建て以上の家屋（新住宅）が増加していく。一方、表-5 部屋数増加要求と建て替え形態、モンフー集落では1994年に1件目が出現、1999年にも2件が建つがいずれも広い敷地に豪華な2階建ての洋館建築が建てられる。モンフー集落に2階建てコンクリート造の一般的な新住宅が建てられ始めるのは2000年以降で保存活動の始まる2003年末でも多くはなかった。保存活動開始後の2004年から駆け込みで狭い敷地に2~3階建ての新築・改造・修理工事が若干あり、2006年5月19日に保存条例が公布され、現在は新住宅の建設は止まっている。

### ② 新住宅とその特徴

伝統的民家から新住宅に建て替える理由について、建て

表-3 新住宅生活調査戸数

集落名	1983~	2000~	2005~	全体
	2階~	2階~	2階~	
モンフー	0	2	4	6
カムティン	4	2	0	6

表-4 新住宅の建設状況

集落名	1951~	1983~		2000~2004		全体
	平屋	平屋	2階~	平屋	2階~	
モンフー	87	104	4	26	11	232
カムティン	43	63	9	15	2	132

替えた家の居住者にヒアリング調査を行った（表-5）。

**a. 伝統民家の修理費用と新住宅の建設費**

伝統的な木造民家を修理せず取り壊し平屋建てレンガ造に建て替える理由は、木造の修理費用に比較して非常に安いからである。しかし同時に、明らかに質の低下した建物であることは実感するようで、お金があれば伝統的な木造民家に住みたいという。住民の住居費に対する意識は、平屋レンガ造の建物が基準になっている。

一方、モンフー集落に見られた洋館建築は、平屋レンガ造に比較し超高級住宅である。しかし、現在では伝統的な木造住宅に比較すれば大幅に建設費は安いようで、立派な新住宅を建てている人でも、伝統的な木造住宅はお金がかかり無理と答えている。

**b. 2階建ての新住宅を建てる理由は部屋数**

1983～2000年までの5事例（C6.2.4.3, M4）は、主屋の建て替えで、しかも、その全部が側室+主室+側室という一般的な伝統住宅ではなく主室+側室で1室欠損した住宅で、間口も狭い事例が多かった。1999年までは建て替えの多くが側室+主室+側室の形式で平屋に建て替えているのに対し、主室+側室で1室欠損した住宅で土地が狭い場合は、主屋を1階建て、側室を2階建てにして2室を確保したと考えられる。主人は主室を寝室とするため3寝室確保したことになる。

**c. 新住宅: 通風・2階の暑さ・階段の不便さ**

1983～2000年までの5例（C6.2.4.3, M4）は、建物はレンガを積み上げ鉄筋コンクリートにより補強した簡易な工法で、外壁はモルタル下地色漆喰仕上げ、一部にタイル貼り。室内は、床が300角タイル貼り、壁は色漆喰仕上げ。

表-6 近代化のパターン（水回りとダイニングキッチン）

No.	建築年	新住宅の形式	理由1	増加分	台所水回り	残った付属屋	2次改築	その後の希望
C6	1983	主室1階+側室2階	流行自慢	若夫婦室	付属屋利用	台所/水回り/倉庫×2	台所水回り増築	部屋数増やしたい
C2	1995	DK 便所+主室1階+側室2階	憧れ	台所水回り+2室	全室内化	倉庫（5×10m）	なし	台所水回り改装
C4	1998	主室2階+側室2階	洋館	子供室×2	付属屋利用	台所/水回り/敷地大	台所水回り改装	台所水回り室内化
C3	1998	主室1階+側室2.5階	左官屋	若夫婦室	付属屋利用	台所/水回り/倉庫	台所建て替え	水回り室内化
M4	2000	主室1階+側室2階	多世帯居住	夫婦室+子供室	付属屋利用	台所/水回り/倉庫	台所水回り改装	なし
C1	2002	ペンシル型2階	作業場	子供室+1室	付属屋利用	作業場/台所/水回り	水回り改装	台所?
M1	2003	ヴィラ型総3階	多世帯希望	台所+7室	全室内化	横屋（3×10m）	なし	なし
C5	2003	ペンシル型2階	離婚→商店	寝室×3	付属屋利用	商店/台所/水回り	なし	台所水回り建て替え
M2	2005	主室1階+側室3階	子供室×3	子供室×3	付属屋利用	台所/水回り/倉庫/豚小屋	台所水回り改装	なし
M5	2005	ペンシル型2階	離婚→商店	店+家	全室内化	なし	なし	なし
M3	2005	店+DK+BD	レストラン	レストラン+家	全室内化	なし	なし	若夫婦室増やしたい
MS	2006	1LDK	別荘		室内化			

No: C（カムティン集落） M（モンフー集落） 6（通し番号）

主屋は平屋で傾斜屋根、側室部分は2階でフラットルーフ、天井は吸音板貼りが多い。

初期の事例では、新住宅は暑いという感想が多かったが、途中から新住宅は天井が高く窓が多く涼しいと変化する。これは設計により新住宅がドンラム村の気候に適応していたと考えられる。

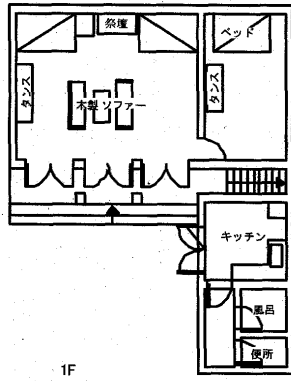
一方、新住宅では2階の部屋が暑いという指摘がある。これは日当たりがよくコンクリートの壁に断熱性がないため避けられない問題で、新住宅の欠点となっている。エアコンをいれるためには通風を重視した室内設計を変更しなければならず、現在のところエアコンはほとんど普及していない。

また、階段の上り下りのたいへんさと危険性をあげる居住者もいる。これもEV設置を考えなければ、新住宅2階の部屋の避けられない欠点であろう。

**d. 便所・シャワー室とダイニングキッチン**

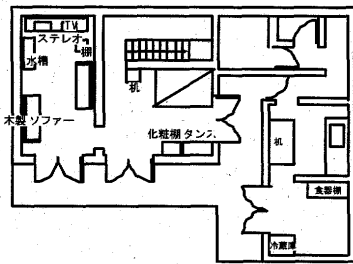
伝統的な民家でも、便所とシャワー室は改変が進んでいたが、新住宅でも問題になる。1983～2000年までの5例（C6.2.4.3, M4）では部屋数が重視されていたが、1例のみは建設時にダイニングキッチンと便所とシャワー室を側室の位置に設置した例（C2）がある（図-2, 3）。他は新住宅建設時にダイニングキッチンと便所とシャワー室は付属屋を利用している。しかし、数年後に新住宅に接してダイニングキッチンと便所とシャワー室を増築する例（C6）、ダイニングキッチンを増築する例（C3）があり、2003年以降は室内化する例が増える（表-6）。

今後は、ダイニングキッチンは付属屋改装か室内化が進み、便所・シャワー室は室内化すると予想される（写真-8・9）。



1F  
平面図 1:200

図-2 DK・水回り増築例 (No. C 6)



1F  
平面図 1:200

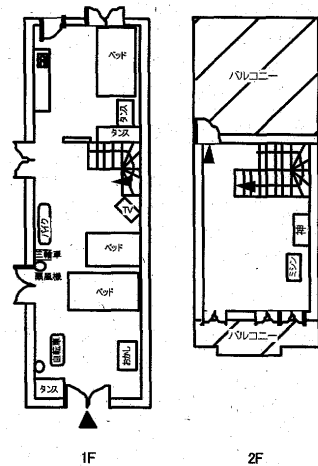
図-3 DK・水回り新築例 (No. C 4)



写真-8 (No. C 4)  
ダイニングキッチン



写真-9 (No. C 6)  
ダイニングキッチン



1F 2F  
平面図 1:200

図-4 ペンシル住宅例 (No. C 5)

e. 狭小土地に建つ都市型ペンシル住宅

狭小土地の場合、ペンシル住宅(2・3階)と呼ばれる間口が狭く奥行き長い住宅が建設される場合がある。部屋構成は、居間空間+各個室又は、1F店舗+居間空間+各個室となる。個室は、子供部屋が多く見られた。2・3階の住宅になった為に、1人1部屋の個室を設ける事が出来た。階層が増え、個室が増えることにより、プライベート空間は増えるが、家族と共に過ごす時間が減る傾向にある。また、屋根がフラットの民家が多く、ベランダやテラスのある民家も見られた。

1F店舗+居間空間+各個室は、都心や都市の郊外で良くみられる形式で1階に店舗を持つ併用住宅の形式である。

この形式は、ドンサン集落のミア寺門前市場周辺に多数建設され問題になっているが、カムティン・モンファーにも出現しつつある。

調査した3例では、作業場を建設し残った土地を利用した、離婚により土地を分割し狭くなった土地に建設した、離婚後商売をするため店舗に適した狭い空地を購入した等

表-7 伝統的民家の特徴と集落保存

No.	建築年	伝統住宅特徴	新住宅特徴	伝統住宅に住みたい	集落保存
C6	1983	天井低い・暗い・涼しい/修理費高い	きれい・明るい/暑い	<input type="radio"/> 資金的に無理	<input type="radio"/> 保存されて欲しい
C2	1995	ひんやり・通風が良い/雨漏り・腐朽	天井高い・きれい/通風悪い	<input type="radio"/> 資金あればもう一度	<input type="radio"/> 古い家の大切さ後悔
C4	1998	涼しい/部屋少ない・雨漏り・湿度が高い	面積が増える/暑い・通風悪い	<input type="radio"/> 資金あれば住みたい	<input type="radio"/> 保存するなら残したかった
C3	1998	昔の家を見習う/天井低い・台風怖い	天井高い・生活しやすい/なし	<input type="checkbox"/> 住みたいと思わない	<input type="radio"/> 自力で木造の保存は無理
M4	2000	涼しい/木造は値段高い・柱が邪魔	広い・天井高く涼しい/なし	<input type="checkbox"/> 今の生活が良い	<input type="checkbox"/> ?対策が実施されていない
C1	2002	庭があり緑がある/不便はない	住みやすい/階段がたいへん	<input type="radio"/> だがお金がない	<input type="radio"/> 自分達だけではどうにも
M1	2003	私の世代は好き/部屋数少ない・暗い	広い・明るい・涼しい/なし	<input type="radio"/> 息子達のため建て替え	<input type="radio"/> 我々も一部木造を残した
C5	2003	住んだことが無いのでわからない	部屋数多い/階段はたいへん	<input type="radio"/> 涼しいから住みたい	<input type="checkbox"/> ?先祖が作ったものは大切だが
M2	2005	なし/壁ボロボロ・木が腐り臭い	部屋数多い・明るい/なし	<input type="checkbox"/> 白蟻の被害や腐る	<input type="radio"/> 1層はきれいだが仕方なく建設
M5	2005	伝統的建物が良い・階段がない/なし	窓が多い/住んでみるとダメ	<input type="radio"/> 昔の場所に住みたい	<input type="checkbox"/> ?凸凹は変だが私には関係ない
M3	2005	庭が良い・よく寝られる/維持費高い	明るい/土地が狭く庭がない	<input type="checkbox"/> 住みたいと思わない	<input type="radio"/> 良い事だと思うが仕方ない
MS	2006				<input type="radio"/> 保存されるため建てた

No: C (カムティン集落) M (モンファー集落) 6 (通し番号)

の理由が見られる。農村集落保存に都市型のペンシル住宅はなじまないため、これについては相当の配慮が求められる。

程度は敷地内で住民の希望に対応するとともに、限界を超える場合は集落内の空き家、さらには一時的には新住宅地への一部移転等を考えていくことになる。

f. 過大な寝室数要求に対する対応

(やまだ みかこ 国際文化研究所)

(ともだ ひろみち 生活環境学科)

2003年モンフー集落に出現する7室の住居(M1)は、新住宅の概念を大きく変えた。主人が主室で寝ず、さらに子供1人1室と生活近代化を先取りしている。しかも、結婚後も同居といった伝統的概念が混在する。この傾向は、主屋1階で側室を3階にする例(M2)にもあらわれ、何らかの対策が求められる。伝統的な住居の形態を維持するためには、主屋が側室+主室+側室で、付属屋1棟を横屋(寝室)とし1~2寝室を確保するのが限界と考えられる。近代的な生活概念でも、主屋が2L、付属屋(横屋)に2寝室、付属屋にダイニングキッチン(DK)と便所・シャワー室、4LDKが限界となる。

現在のベトナムは、子供が多い中で生活近代化が進むが、将来的には少子化時代が来る。当面の処置として、規制だけでなく空き家の活用を斡旋する、一時的に住むための新しい住宅地を確保するなどの検討も必要であろう。と同時に、現在の限られた期間の問題であることも考慮に入れる必要がある(表-7)。

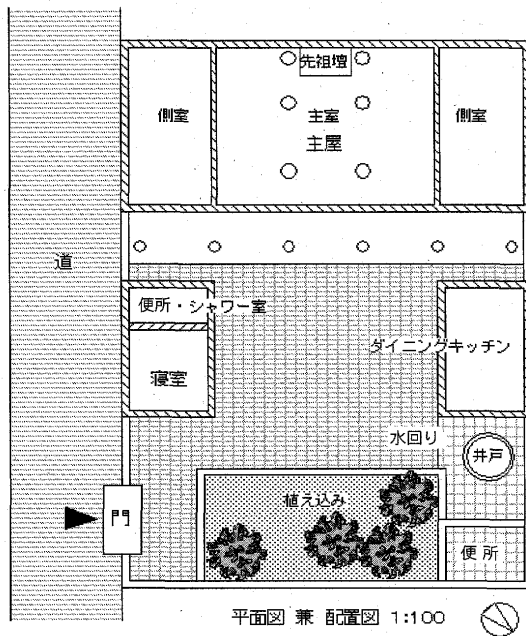


図-5 伝統的民家の部屋数増加と近代化の例

5 まとめ

今後、保存条例の規制と管理事務所による対応により、住民の希望を満足させつつ伝統的住宅の保存を推進することになる。図-4はその解決策の1例に過ぎないが、一定